



クロージングリマーク

北東アジア経済発展国際会議実行委員会委員長
ERINA代表理事
西村可明

昨日からの長い会議が終わろうとしています。会議には海外からの参加者をはじめ沢山の方にご出席いただき、有り難うございました。今回は北欧から初めて、フィンランドの国際問題研究所主任研究員のカッリオさんにお出でいただきました。北欧のバランスのとれた公平な分析に期待した次第です。また、本会議開催のために、各国大使館や総領事館、我が国の関係機関から、ご協力とご支援をいただきました。本会議実行委員会を代表して、併せて厚く御礼申し上げます。

大変お疲れのところ申し訳ありませんが、もう10分程度時間をいただいて、クロージングリマークスを述べさせていただきます。貴重な講演と報告をいただき、また討論をしていただきました。ここでその一つ一つに言及することは出来ませんが、本会議のメッセージとなるような重要なポイントについて、私の感想を申し上げます。

今年の会議では、国際政治的意味合いの、少々重たいテーマを取り上げさせていただきました。何故なら、ウクライナ問題が気になるからです。ウクライナ問題という遠いヨーロッパの出来事で、北東アジアとは無関係なように見えますが、EUとロシアの対立、米ロの対立を生むに至っては、ずっと身近な問題に思えて参りますし、北東アジアの経済発展にとって看過できないからです。

この問題には、セッションAで議論しましたように、ウクライナのEUやNATO参加をはじめ様々な問題が含まれますが、深刻な対立を招いたのは、ロシアによるクリミア半島併合など、実力による国境変更の動きにあります。ご存じのように、EUの誕生と存在の意義は、第2次大戦後国境問題を多数抱える欧州が、連合体の構築によって、国境問題の壁を低くし、平和的国际環境を創り出そうとする点にありました。ですから、欧州における、実力による国境線の変更は、EUの理念とその努力を否定しかねませんし、広く戦後の国際秩序を形骸化する危険な動きと見なされているのです。

ひるがえって北東アジアには、カッリオさんの基調講演にある通り、アメリカに次ぐ経済大国となった中国では、政権の正統性が経済成長に依存し、したがって安定した国

際環境が必要になるにもかかわらず、南シナ海や東シナ海で周辺国に不安感を広めているという見方もあります。黒川元大使は、大国と非大国の存在を指摘されましたが、これに戦後国際秩序の尊重という視点を重ね合わせてみますと、北東アジアは、戦後国際秩序尊重派の非大国と、戦後国際秩序が必ずしも国益にならず、摩擦が生じかねない大国、それに大国ではありませんが価値観から見ると後者に近い北朝鮮との対立構造が潜在的には存在していて、世界の縮図のように見えて参ります。北東アジアが乗り越えなければならない課題は、もう一山あるといった感じがします。

セッションAでウクライナ問題について、教えられることが多かったと思いますが、EUとロシアの対立の影響でロシアの東方シフトが促進されるというのが共通のご意見でした。この東方シフトには、歓迎すべき側面があります。アジア太平洋市場への参入とその重視は、ロシアがアジア太平洋諸国との協力関係を大事にする事に繋がるからです。これは北東アジアの経済発展にとって千載一遇のチャンスとも言えます。他面で、戦後国際秩序との摩擦を持つ中ロ大国の接近という面もあります。ウラジオストクLNGプラント構想の揺らぎに見られるように、アジア市場重視が日ロ協力の発展に繋がらない可能性も心配される訳であります。しかしセッションAでは、ウクライナ問題発生の背景として、ウクライナにロシア人が多数居住しているという歴史的事実が指摘されました。これは北東アジアにとって看過できない論点でして、じつは北東アジアには、そうした背景を持つ地域はほとんど存在せず、ロシアがアジアで新たに領土問題を引き起こすというようなことは非現実的だと思われます。ロシアが国益として本格的に東方シフトを追求し始めている時、G7（先進国首脳会議）の一員としてアジアのリーダーである日本が、そのアジアでロシアをいかに遇すべきか、問われているのだと思います。中国の場合も、カッリオさんの指摘にあるように、政権の存在意義の観点からみて経済成長と安定した国際環境が必要な訳で、国際協調的アプローチが今後強まっていくことに期待したいと思います。

次に、TPP交渉の進展があります。これもここ数年取り上げてきたテーマですが、交渉が大詰めを迎える中、その進捗状況が大変気になり、今年は力を入れて取り組んだ次第です。内閣官房TPP政府対策本部矢田内閣参事官から、大詰めを迎えご多忙の所、TPP交渉について具体的に詳しく説明をいただきました。分野によって進捗度に違いがあり、合意済み・合意近い・取組中・困難な課題残る分野など詳しい説明をいただきました。現在アメリカで行われている交渉次第で、3月の閣僚級会議へ進めるかが決まりそうです。

浦田さん山下さんの報告にありましたように、我が国のTPP参加の必要性については、工業製品の生産過程がいくつもの段階に分割され、工場内生産物流が多国間にまたがるような生産の発展段階では、貿易自由化と新しい国際ルールづくりが不可欠であること、農業においても人口減少に進む日本において農産物の輸出こそが食料安全保障に繋がること、農家支援を関税に代わる直接支払いで行い、移行期の自由化のショックについては適切な支援措置を採ることなどを条件として、日本のTPP参加を推進すべきだというのが日本についての基本的論調でした。

今年は、AEI研究所（アメリカ企業公共政策研究所）のバーフィールドさん、中国社会科学院APEC・東アジア協力研究センターの沈さんにもお出でいただき、興味深いポイントをご指摘いただきました。バーフィールドさんからは、アメリカにとってのTPPの意義について、TPPはそのアジア安全保障、アジア回帰政策のシンボルとしての側面を持つというご指摘は斬新でした。また、オバマ政権にとって相手国とのTPP交渉の他に、米国内での民主党や共和党指導者達との困難な交渉が待ち受けているようです。日本の最近の新聞報道でも、TPPをめぐる、米共和党のハッチ上院財政委員長が22日、大統領に貿易交渉を一任するTPA（貿易促進権限）法案を月内にも議会に提出する考えを表明したと報告されており（Am 1月24日付け）、大詰めに来たTPP交渉で、オバマ政権の国内体制の整備が進むことになりそうです。また沈さんからは、多数の個別的FTAが錯綜して弊害をもたらす「スパゲティ・ボウル現象」の克服の観点からもTPP・RCEP・日中韓FTAなど広域経済連携協定に積極的な意味があること、米国のアプローチ、まず二国間自由貿易協定を作りそれを多国に拡大していく

アプローチが有効であるが、しかし中国はまだ経験が少なく国際的ルールをつくる側にはではなく、受け入れる側にあるという冷静な客観的分析が提示されました。

セッションCでは、欧州と東アジア間の物流の新しい動きを取り上げました。一方で柴崎さんのご報告にあるように、欧州と東アジア間を結ぶ南回りに比べ距離を大幅に短縮できる北極海航路が関心を呼んでいます。とくにヤマル半島のLNGを北東アジア・日本に運ぶ構想も検討されるなど、ロシアの東方シフトのなかで、注目されています。他方で、町田さんは、「新シルクロード」あるいは「チャイナランドブリッジ」と呼ばれる中国中西部の都市からカザフスタン、ロシアを経てドイツに至る新たなヨーロッパ向け鉄道貨物輸送が既に開始され、ドイツだけでなく日本企業も関心を示している点が指摘されました。従来東アジアと欧州を結ぶ輸送経路は、南回り海運と航空輸送を除けば、シベリア鉄道しかありませんでしたが、この状況が今大きく変わろうとしています。この状況変化にシベリア鉄道はどう対応しようとしているのか、今回ご報告を聞くことが出来ませんでした。パワーポイントからは、そのスピードアップと技術革新に対する積極的取り組みがうかがえますし、日本通運などはシベリア鉄道と協力して、船・バス航空・鉄道で西部に運ぶ自動車・建機部品の柔軟な輸送網の構築を構想しているようですから、新しい時代のシベリア鉄道がどう変わっていくのか期待が持てます。最後に、ソフト面あるいは制度面ですが、こうした物流を促進するには関税手続きの迅速化の問題がありますが、スホルコフさんのご報告では、道路輸送・鉄道輸送における義務的到着前情報提供の導入が関税手続きの迅速化に、電子化などの技術面の革新とともに、貢献しており、これを海上輸送にも拡張する可能性があるようです。欧州と東アジアを結ぶ物流の迅速化というテーマに、今後も注意を払っていきたいと思います。

以上をもちまして私のクロージング・リマークとさせていただきます。報告者の皆様、フロアで熱心に耳を傾けて下さった皆様に心から感謝いたします。また2日間大活躍して下さいました通訳の方に、お礼申し上げます。ご清聴有り難うございました。